

サブ・カルチャーの記号論としての ブルデューの界概念 ——象徴構造の差異化・分化——

平石 貴士ⁱ

本稿はサブ・カルチャー研究にブルデューの界概念を適用することによって、サブ・カルチャー内で共有されている記号体系を媒介とした界の力学を検討する。多くのサブ・カルチャー研究がサブ・カルチャーの自律性を承認ないし否定するなかで、その自律性はサブ・カルチャーに関わる行為者たちが作り出す記号体系を中心に議論されてきた。しかしサブ・カルチャーに特有の記号体系を独立した存在として扱う分析はメイン・カルチャーとの力関係の分析を無視する傾向にあった。全体社会的な空間とより分化した界との力関係、また界の内部にさらに分化した下位-場と全体としての界の力関係を捉えようとする界概念のアプローチは、これらの力関係を捉える分析枠組みを与えている。この界の力学的モデルに記号論的なアプローチを接合することで、より基礎的な記号体系（ソーシャルにおけるラング）からある特殊な社会領域の行為者たちに共有された特殊な記号体系が分化すると捉えることができる。複数の記号体系間の関係はある力学として作動するが、この力学は行為者たちの社会的・教育的条件によってその生産を支えられている。ブルデューは界の力学的作用（支配-被支配、保守-転覆、資源の不均等）を分析の中心に据え、その力学的作用は界における記号体系という媒介を通して闘われるという、いわゆる象徴的な闘争として分析している。

キーワード：ブルデュー、分化、差異化、界、象徴権力、記号論、サブ・カルチャー

はじめに

サブ・カルチャーが生産され、受容される社会的条件を調べ、その対象を他の社会的事実との関連のなかで捉えるならば、「ばらばらの原子のように」独立した個人の趣味としてサブ・カルチャーを捉えることはできない。デュルケームが行った様々な貢献（例えば、犯罪についての正常社会学において犯罪の社会的機能を共同体の集合的感情の状態に結び

つけた考察 Durkheim [1894] 2007) が示したように、サブ・カルチャーもまたメイン・カルチャーとの関係のなかで、また他の社会的・教育的条件との関係のなかで考察することを試みるができるだろう。

本稿はサブ・カルチャー研究にブルデューの界概念を適用することによって、サブ・カルチャー内で共有されている記号体系を媒介とした界の力学を検討する。ブルデューは現代の社会を全体的な社会構造から相対的に自律した複数の空間が機能分化している社会であると捉え、それぞれの分化した領域を界という概念によって表現した。彼の界概念は文学

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

界や政治界など高級文化ないし正統文化を具体的な研究対象とする中で形成されてきた (Bourdieu 1991, 1998)。その中で下位-場 *sous-champ* という概念によって界がさらに分化することが示されているが、ブルデュー自身はサブ・カルチャーの分化までは具体的な研究対象とはしていない。そこで本稿は界概念をさらなる下位-場へと分化した領域に適用する際の理論的枠組みを検討し、ブルデュー自身が具体的に解明しなかった、より分化した空間 (サブ・カルチャー) への界概念の拡張を考えたい。その際にブルデューはほとんど強調しなかった界が保有している共有の記号論的体系、価値論的体系という媒介を前面に押し出したい。私見では、ブルデューは界の力学的作用 (支配-被支配, 保守-転覆, 資源の不均等) を分析の中心に据えたが、界が保有する共通の記号体系と価値体系の具体的対象についてはあまり言及しなかった。しかし、この力学的観点に加えて、価値体系と記号体系の問題を研究対象とすることで、界の参入者が身につけるべき文化資本やハビトゥスという問題をより鮮明にできると思われる。また、この観点は界の新参者への実践的教育という点でも重要な点であり、界概念をより豊かに拡張できると考えられる。

国内の研究においてはブルデューの象徴権力論について理論的に検討した研究は多い。無意識化された象徴構造が支配を「自然なもの」として見させ、正当化している点を議論している論文としては、例えば、林 (1991)、宇都宮 (1995) がある。しかし、これらの論文は象徴権力論と界概念の関係を考察していない。すなわち、界の分化と全体社会としての象徴権力作用との連関は考察されていない。またブルデューの『再生産』(Bourdieu et Passeron 1970) の研究を受けて、日本では教育社会学の分野でいわゆる学校による「文化的再生産」の機能の研究が実証的にも多く行われてきた。代表的な研究としては宮島 (1994) がある。「文化的再生産」論も基本的には国家による教育の象徴権力論であり、やはり全体的な水準での象徴権力論の範疇だと言えるだろ

う。また、行為、実践、ハビトゥスなどの概念の関係によって、ブルデューにおける構造の変容と再生産の関係を理論的に検討している論文 (田辺 1995、宇都宮 1995、水島 1995) があるが、これらも国民国家的、全体社会的な構造の変容論であり、界の分化と象徴権力構造の変容については考察されていないし、界の相対的自律性についても議論されていない。つまり総じて言えば、日本の研究においては界の分化の問題があまり議論されてこなかったと言える。ましてや界における記号論ないしシンボル体系の問題は議論されていない。

カルチュラル・スタディーズの領域ではグルヴァレック (Glevarec 2005) がソーントン (Thornton 1996) などのサブ・カルチャーのモノグラフ的研究を根拠にして¹⁾、ブルデューの構造論をホーリズム的と評価しており、サブ・カルチャーの自律性を認めないものと評価している。この論点はブルデューが界概念において界がさらに下位-場へと細分化されうることを指摘していることを取り上げていないがために²⁾、ブルデューが常に一方におけるデュルケーム的な (方法論的) ホーリズムのアプローチと、他方における相対的に自律した空間 (界) とを往復しながら考えようとした点を見落としている。つまり、サブ・カルチャー領域におけるブルデュー理論の適用はまだ明確に示されていないと考えられる。

本稿はブルデューの界概念の中から分化・差異化についての議論を検討し、ブルデューのアプローチが社会全体の水準における象徴権力論を扱っているだけでなく、全体構造から様々な界が相対的に自律し、分化していく過程もまた分析していることを示す。ブルデュー自身の界概念についての議論は静態的な構造主義を抜け出し構造の変容を説明することを目指し、行為者間の支配と闘争による構造の生成という説明モデルを構築している。彼の議論は界の力学について的一般モデルの生成へと向かっているために、界における具体的な記号体系の明示化を彼自身はあまり行っていない。グルヴァレックに代表されるサブ・カルチャーの自律性についての議論は

サブ・カルチャーの領域において特殊化した記号体系の共有をその根拠としているが、その記号体系の存在は界と界のあいだや界と下位の界のあいだに力学的作用あることと矛盾しない。すなわち、ブルデューの構築した支配と闘争の力学的モデルは実践されている具体的な記号体系の相対的な自律性を説明モデルのなかに組み込むことができる。本稿では、これらの議論を整理し、国民国家的な水準における記号体系と分化した界における記号体系の力関係を弁証法的に往復しながら思考するブルデューの方法を析出する。その際に、ブルデューが界、資本、位置という概念によって界の力学的性質を強調したためにあまり言及していない界の記号論的システムの性質を再び取り上げることが意図している。つまり、界のなかで行為者が獲得する象徴的資本が記号体系という認知システムを介して現実化していることを再び確認することによって、相対的に自律した記号体系が界の力学における中心的な争点であることを示す。

以上の論を展開するために、まず界概念が対象としているものは何かを明らかにする必要がある。特にブルデューが踏襲しているソシュールやデュルケームが提起した問題系をより分化した領域へと適用していくプロセスを考察するために、彼らの方法論的全体主義のアプローチを対象の構成の仕方として正しく評価した上で、ブルデューが前進させた構造の分化・差異化という問題枠組みを論じる。全体性と分化した領域との相互関係を考える中で、界における行為者たちが保有する記号論的体系という契機を明らかにしたい。

I. 全体としての社会と分化した空間

I-1. 社会的に共有されたものとしての象徴体系

デュルケームが社会学の対象として構築した社会的事実とソシュールが言語学の対象として構築したラングは共通した性質を持っている。デュルケームが個人から独立した外的拘束性を強調したように

(Durkheim [1894] 2007), またソシュールがパロールから独立したものとしてのラングを提起したように (Saussure 1916), ディシプリンの創設者として両者とも個人から独立した社会的なものとしての共有物を研究対象として構成している。社会的事実個人から独立して価値体系を個人に強制するものであり、いわば社会の全構成員に共有された価値体系でもある。ラングは個人の話すパロールから独立して、その言語を話す者全員に共有された言語体系である(言語を記号と捉えれば共有された記号体系である)。彼らは学の創設者として端的な問題構成を行い、科学として成立させるために、ひとまず個人という問題設定を後景に退かせている。そのため、デュルケームの枠組みだけでは、個人やある集団だけが持つ価値体系を問題にすることは難しい³⁾、ソシュールの枠組みだけではスラングや「内輪だけで意味を持つ言葉」などを説明することが難しい。しかし、学を始めるにあたって最初から個人などの性質に向かってしまえば無限の対象を相手にしなければならなくなってしまうために、両者はまずもって基本的な性質(原初形態)を取り上げることで、新しい科学の対象を構成することに成功したと言える⁴⁾。

付け加えれば、レヴィ＝ストロースもまた究極的には人類の共通の無意識の構造を解明したいと考え、個人から独立した構造を研究対象として据えた⁵⁾。これらの三者は、構造主義的思考法の第一世代とも言えるが、みな共通して個人から独立した社会的なものを捉えようとしたと言える。

次にブルデューがそこに付け加えた貢献について論じたい。その貢献は多岐に渡り、すべてをここでは扱う必要はないが、本稿において強調しておきたいことは以下の2点である。①界という概念によって全体社会構造の分化を明らかにしたこと (Bourdieu 1971, 1979, 1991, 1998)。②構造の中に支配と闘争があることを示すことで、構造が変化し、運動する力学的なメカニズムを提示したこと (*ibid.*)。

ブルデューは現在の先進資本主義国においては国

民国家レベルでの全体としての社会が、相対的に自律した様々な領域=界に分化していることを指し示すことで、全体としての社会的なものとは質の異なる社会領域を対象とすることが可能になったと言える⁶⁾。

I-2. 構造, 空間, 界概念におけるデュルケームとウェーバーの総合

ブルデューの界概念が界における力学的な問題を中心にしていたことを後に論じるために、ここではブルデューが分類体系・象徴体系という概念に支配-被支配という力学を導入したことを論じたい。

ブルデュー自身、デュルケームが立てた分類体系・象徴体系という問題系を評価している (Bourdieu 1977: 407)。個人から独立して知らぬ間に内面化されている分類体系は、自覚を持たずに形成されている知覚の図式であり、その知覚図式は実践においてははっきりと自覚されていないがために、科学として意識化される必要のある対象である⁷⁾。多くの論者が指摘している通り (Lenoir 2012: 54-56, Heinich 2012: 78-79)⁸⁾、またブルデュー自身も述べている通り (Bourdieu et Passeron 1970: 18-19, Bourdieu 1977)、ウェーバーから正当化 *légitimation* と正統性 *légitimité* という概念を受け継いだブルデューは、一度形成され、社会的に共有された分類体系がヒエラルキー構造を持っているために、ある行為者の支配を正当づける傾向にあることを象徴権力という概念によって示した。すなわち、界や社会空間はヒエラルキー構造を持っているというブルデューの見解のなかに、つまり分類体系はヒエラルキーを持ち、正当化機能を果たすという見解のなかに、デュルケーム的な分類体系という問題系と、ウェーバーの権力論的な問題系との接合を見ることができ⁹⁾。学歴のあるなしという分類や芸術的才能のあるなしという分類は、その分類体系が社会の中で共有されることによって、諸個人の間でのヒエラルキーを作り出し、支配を正当づける性質をもつ¹⁰⁾。この支配のメカニズムを明らかにするために、はっき

りと意識されないまま働いている分類体系を意識化する必要があるとブルデューは考えたように思われる。それゆえにこそ彼は、国家と学校教育が作り出す分類体系・象徴体系の問題を研究の対象としたのだろう (Bourdieu et Passeron 1970, Bourdieu 1997)¹¹⁾。

国家と学校教育という問題枠組みに示されているように、全体としての社会に共有された分類体系という社会的事実の問題系にもブルデューは取り組んでいる。ブルデューにおいては共通の認識カテゴリーが形成されるメカニズムとして学校という機関の全体的機能が強調されている。そこで、マクロ的な現象としての分類体系の問題と、より分化した現象としての界における分類体系の問題を常に関連づけながら問題を立てていくブルデューの思考を、権力の界という概念によってみていくことにしよう。

I-3. 権力の界 *le champ de pouvoir*

ブルデューは全体としての社会の中で分化した界の概念を形成するにあたって、まず権力の界という概念を提起している。

権力の界は、様々な形態の権力間の、ないしは異なった種類の資本間の力関係の状態によってその構造が規定されている諸勢力の界である。それはまた不可分に、異なった権力の所有者間で繰り広げられる権力闘争の界であり、それぞれの界の内部で支配的位置を占めるに足るだけの特定の資本量 (特に経済的ないし文化的資本) を所有しているという共通性をもつ行為者や諸機関が、この力関係を保存しようとするか、変革しようとする戦術の中で互いに対立し合っているゲームの空間である (Bourdieu 1989: 375)。

そしてブルデューが「文化作品の科学」のために必要であるとする3つの操作のうち、第一に必要なものとしてあげているものは「文学 (などの) 界を権力の界の中に位置づけること。文学 (などの) 界

は権力の界との関係において、ミクロコスモスとマクロコスモスの関係の中にある」(Bourdieu 1991: 5) ということである。それぞれの界は相対的に自律しているが、大きくは権力の界という空間の中にある。

「権力の界の出現は、相対的に自律した複数の界の出現、すなわち社会的世界の分化と連関している(これを階層化の過程と混同しないように注意しなければならない。これが社会的ヒエラルキーの確立に帰結するにしても)」(Bourdieu 1989: 376, note 2)。つまり分化した界は相対的に自律しているけれども、つねに権力の界における力関係によって考察されている。

ブルデューは、知識人や芸術家の界を分析するにあたって三つの契機を提起する。

まず第一には、支配階級の構造の中での知識人や芸術家の位置の分析(あるいは彼らがこの支配階級に属していないとか、その階級の出身に属していないとか、その条件に属していない時に、この構造との関係においてもつ位置)。第二に、知的あるいは芸術的正統性をめぐる競争の状況化におかれたこの集団が所与の時点において知識人の界のなかで占めている諸位置間の客観的な位置構造の分析。またより良い方法としては、相対的に自律した諸関係が接合されたそれぞれのシステム(権力の界と知識人の界)に固有の論理の構築は、ある階級や個人のバイオグラフィーのうちの有効な諸特性のシステムとして社会的軌道を構築するための準備的条件である。そして最後の第三に、構造化され構造化する構造として、行為者集団の諸実践やイデオロギー傾向を生成し統一する原理を構成し、また社会的に形成された性向のシステムであるハビトゥスを構築することも準備的な条件である。支配階級の構造の中で規定された位置をそれ自身で占めている知識人の界の内部において規定されている〔諸個人の〕ある位置やある軌道が、ハビトゥスに対して自己実現のために多かれ少なかれ望ましい機会を与えるのである

(Bourdieu 1971: 15-16. 強調はブルデュー自身による。以下同様)。

ブルデュー自身の研究史において界概念を明確化していく1971~72年の時期のこの論文において、ブルデューはまず支配階級の権力の界の中での知識人、芸術家の界の位置という問題設定を提起している。つまり、分化した界は、より中心的な権力の界との力関係と位置関係という問題枠組みにおいて考えられようとしている。一方で、分化した界の固有の論理および相対的自律性という認識があり、他方に中心的、全体的な権力界との各界の力関係という認識があることがわかる¹²⁾。

ブルデュー自身の問題関心はデュルケームの提起した全体社会的な集合的表象の生成という問題(国家と教育の問題)とより分化した領域で生成される表象の問題(相対的に自律した界の問題)を、両者の力関係の中で考察することに向かっている。

グルヴァレックは、よくデュルケームがホーリズム的だとか社会実体論的であると批判されるのと同じように¹³⁾、ブルデューのアプローチをホーリスティックないしソーシャリスティックであると批判している(Glevarec 2005: 82-89)。グルヴァレックはサブ・カルチャー研究内でなされた多数のモノグラフ的研究を根拠に、全体国家レベルでの表象とは独立したサブ・カルチャー内の表象の存在を指し示すことで、サブ・カルチャー内部において行為者たちはホーリズム的な正統文化秩序から独立した表象を形成することを明らかにする¹⁴⁾。しかし、サブ・カルチャーの領域が、界がさらなる下位一場に分化した領域であると考えらるならば、下位一場において全体としての界から相対的に自律した表象が出現するのは当然なことである。ブルデューの考察が全体としての国家権力的集合表象と分化した界において生成される表象とのあいだの相対的自律性を問題にしている以上、どの程度ホーリズムが現実成立しているかは、まさにその界の相対的自律性の程度によるのではないだろうか。つまり、国民国家的全体としての

社会空間との中で分化した界と、また界の中でさらに分化した下位-場、それら相互の力関係の程度によって、そこで生成される表象がどの程度独立しているかが決定されると考えることができる。かくして、サブ・カルチャーの相対的自律性を示したモノグラフ的研究はこの力関係の分析と統合できる余地を持っている。それこそブルデューがスローガンとした客観的構造と主観的構造の一致という課題に他ならないのである。

このアプローチはサブカルチャーの様々な界（マンガの界やポピュラーミュージックの界など）が全体社会の威信と権威の構造の中でどこに位置しているか、という問題を提起する。またより正統的と思われる芸術や大学の界との関係でどこに位置しているか（おそらく下に位置している）という問題を提起する。

また確認しておく必要があるのは、ホーリズムのアプローチはあくまでも方法論上の問題であり、科学が原初的な段階で対象を構成するために行う最初の抽象は具体的なものからはもっとも離れているということである（その意味においても社会的事実とは具体的な個人や事象からは離れている）。つまり、全体構造としての社会的事実のもっとも原初的な性質を提起することからはじめて、次々により複雑な抽象モデルへと進んでいくことで科学は具体的な対象に接近することができる。より分化した対象は、それだけ複雑な抽象を要求するだけに、私たちが実践において具体的なものを具体的なままに捉えて、操作していることからくる「実践感覚」の表象を科学はすぐには満足させないということを前提にしておく必要があるだろう。

このようにブルデューは社会の全体構造と様々な界との間の力学を考えようとしていた。以下では各界の内部構造においてもまた、力関係と闘争の力学によって彼は考えようとしてきたことを見ていく。

II. 力学的モデルとしての界概念

II-1. ブルデューの力学的な界概念

界の力学を考慮する上で重要なことは、界が相対的に自律する根拠となっている界固有の法則と利害関心である。ジュールダンとノーランによれば（Jourdain et Naulin 2011: 102）、「界の自律化は、当該の界において固有に賭けられているもの enjeu の定義によって生じている。例えば政治の界の争点 enjeu は権力である。経済の界の争点は富であり、芸術の界の争点は承認である」。界における行為者たちはこれらの固有の争点をめぐって競争している。そのことからそれぞれの界は固有の法則をもっている。

ブルデューは界に固有の獲得物を目指して戦われている状況を「ゲーム／遊び jeu」と表現している。「ゲームが存在するためには、プレイヤーたちはそのゲームを信じ、その争点の価値を信じ、この争点をめぐってプレイする利益を信じていなければならない」（*ibid.*: 103）。ブルデューは、「遊びを意味する ludus に由来するイリュージオ *illusio* というラテン語」（*ibid.*: 103）によって、「ゲームに熱中していること、ゲームによって忙しいこと、またそのゲームは割に合うと信じていること、より簡単にいえば、それはプレイする労苦に値すると信じているということ」（Bourdieu 1994: 151: 邦訳186）を表現する。イリュージオという言葉は「ゲームの外にいる者にとっては、そのゲームの利益が幻想であり、不条理であるように見えること」を強調する（Jourdain et Naulin 2011: 103）。つまり、この言葉は、界で争われている争点を見ることのできない界の外の者にとっては、芸術家や学者や政治家が無私無欲 *désintéressement* であるかのように見えることがありうるということ表現している。逆に言えば、界の内部の者同士ならば、互いの行為を「目的合理的行為」として理解可能であるとも言えよう。

イリュージオの内面化はその界に適したハビトゥ

スを身につけることによって可能となる (*ibid*: 103)。すなわち、それぞれの界に固有の法則に適應するための「社会化」やイニシエーションが存在している。このハビトゥスを身につけることで行為者は界に固有の争点を見ることができるようになり、またその争点を承認する傾向を持つようになる¹⁵⁾。

かくして界は、界に固有の価値体系を内面化した行為者たちによって構成されることで、相対的に自律していく。とはいえ、その界が社会的にも高度に威信の獲得可能な界であり、すなわち権力の界の中に位置を持っており、例えば国からの助成金や文化生産物の販売を通して、界の中で承認された位置を占めていること(象徴資本の保有)を経済資本へと転換できるということも相対的に自律するためにまた重要な要因である。そういった経路によって、学者や芸術家の無私無欲のゲームも十分に合理的なゲームとなるのである。

このように界を固有の社会法則を持った世界として定義したうえで、ブルデューは界の内部における各行為者同士の力学を以下のように示す。

界は、さまざまな位置の間の客観的な諸関係(支配関係や従属関係、相補関係や対立関係など)から成る網の目である。[...]それぞれの位置は、他の位置との客観的な関係によって客観的に規定される。言い換えれば、諸特性の全体的な配分構造の中で、他のすべての位置との関係においてその位置を定めることを可能にする、関与的すなわち有効な特性のシステムによって客観的に規定されるのである。すべての位置は[...]界の構造における現働的・潜在的な状況に依存している。ここで界の構造というのは、その所有が当該の界で賭けられている固有の利益(文学的権威のような)の獲得をもたらす各種の資本(または権力)の配分構造のことである」(Bourdieu 1998: 378; 邦訳 II 88-89)。

界は行為者同士の力関係を表現する位置関係(この位置関係は有利な者/不利な者、支配的な者/非

支配的な者という力関係の位置関係である)によって定義され、支配的な位置は界に固有の資本の所有として捉えられる¹⁶⁾(界での支配的な位置という象徴資本は、様々な経路を通して経済資本にも転換可能である)。このように位置と資本という概念を導入することで、界における行為者たちの力学を捉えることができる。つまり、科学の界であるならば、ある学説の影響力を増大させようとする利害関心によって、界における位置の転覆や保守をめぐる運動を説明することができる。すなわち、その界に特殊な資本の獲得と独占をめぐる運動として界の力学を考えることができる。

このように位置や資本という概念、さらには行為者たちの利害関心という概念を界のモデルに導入しないならば、なぜ界の構造に変化が起こるのかを説明することが難しくなる。利害や戦略という概念を導入することで、所与の時点において不利な位置にいる、もしくは所有資本の少ない行為者が現在位置の転覆を狙うことで構造の変化が起こる、というモデルを形成することが可能になる。レヴィ=ストロースやソシュールなどの構造主義第一世代が学の創設のために、個人から完全に独立した構造を対象として構築したことを十分に評価し、継承した上で、ブルデューは構造の変容を説明するために、各行為者の位置、資本、利害関心、戦略などの概念を構造モデルに付け加える¹⁷⁾。これによって力学的な構造モデルを提起したことはブルデューの貢献と言ってもよいだろう。

界の中にホーリズム的に課される表象は、界の中の行為者たちの優劣を決める分類体系を構築する。現行の分類体系において劣っているとされる者たちは、別の秩序を持った表象を課そうすることで位置の転覆戦略を取りうる。他方で、界の中で強制的に課される表象は、新参加者が界に参入するための条件でもありうる。芸術の界ならば、芸術作品を見定め評価する能力、あるいはあるスタイルを作り出す能力であったり、社会学の界であれば、社会学者の間で最低限共通に持たれている社会学的知識や統計的

技術、あるいはその分野での先行研究の把握などは、界に参入できるか、もしくは界から排除されるかを定める基準となっている。界が高度に自律化すればするほど、そこで共有されている知識体系を身につけなければ界に参入することが難しくなる。つまり、新参者は各界において特殊化・分化した「社会化」を受けることが必要になってくる。それらの知識や認識図式はハビトゥスのレベルで身体化される必要がある。

ブルデューによれば、作品とはハビトゥスと界における位置との出会いによって形成されるものである。

芸術作品が痕跡として持っている社会的規定性は、一方では生産者のハビトゥスを通して行使されている。すなわちハビトゥスは、社会的主体（家族など）としての、また生産者（学派や職業的な交際など）としての、ハビトゥスの生産の社会的条件に帰属しており、[そのように生産された]ハビトゥスを通して社会的規定性は行使されている。また他方では、社会的規定性は、ある特定の（多かれ少なかれ）自律した生産の界の中で生産者が占めている位置の中に刻まれている社会的な要求と強制を通して行使されている。ひとが「創造」と呼ぶものは、文化生産の分業体制の中ですでに確立されているか、もしくはこれから可能性のある位置と、社会的に構築されてきたハビトゥスとの間の出会いのことであり、[……]したがって芸術作品の主体とは、見かけ上の原因である個別的な芸術家ではなく、また社会集団（……）でもなく、全体としての芸術生産の界である（Bourdieu 1984: 210-212; 邦訳268-271）。

上記のように外的拘束性として構造的に課される強制性は、界として分化した共通の記号体系を通して課されるだけでなく、界における行為者たちのそれぞれの位置における行為の客観的可能性という形を通して、より細分化し、差異化した形で行為者に課されているとブルデューは考えている。一方では

界の歴史が存在し、他方では家庭で生産されるハビトゥスというまた別の個人的歴史の経路を通して社会的規定性は作用している。すなわち、社会的強制は、界における行為者全員に共通のものだけでなく、界における位置を通して分化した形でも行使されているとブルデューは考える。位置という構造的な概念を通して、外的拘束性の問題もまた分化しているのである。

II-2. 力学的なモデルと記号体系、価値体系モデル

以上のようにブルデューの概念体系は、構造内での力関係、位置関係を捉えるために構築されている。また界のシステムは、上述したように、より中心的な権力の界との関係、すなわち他の界との力関係によっても考察されている。ブルデューの構造論的思考法は、全体構造と分化した構造との往復を通して進められている。彼はこのように様々な界を力関係という視点を通じて一般化する試みを進めたが、しかし各界における記号体系や価値体系についてはあまり言及していない。ブルデューの中心的な関心は界における変容の力学の解明であったため、その界で形成される具体的な表象の説明はブルデュー自身によってはあまりなされておらず、それぞれの個別的なモノグラフの研究がまた必要である。例えば、ある知識人界において有力な表象が界全体に押し付けられたとき、その押し付けられた分類体系は具体的にどのようなものかということについてブルデュー自身の説明はあまりない。しかし、社会学の界では社会学の教科書を見ることで、より具体的な表象や強制される知識を見ることができる。また、芸術界において共有されている知識体系やコードの体系はパノフスキーによる美術史研究において研究されている¹⁸⁾。

これらの研究は共通知識のコード化を目指して各分野で進められている。だが、ブルデューの関心はもっぱらこれらのコード化の変容の力学にあったと言えよう。つまり、実際に各界においてコード化が進められる知識そのものに貢献するよりも、今まで

ほとんど誰も言及することのなかったコード化の力学を示そうとしたと言える。知識をコード化し、そのコードを界の構成員に課すことは、支配と非支配の力関係を変容しうる (Bourdieu 1979: 559-561: 邦訳Ⅱ 357-361)。この界の力学を説明するために界における共有のコードについての具体的な分析は後景に退いてしまったと考えられる (『芸術の規則』における文学界の力学についてのブルデューの説明は実践的に文学を書くための技術を教えることよりも、その力学を理解させることに向かっている)。

ブルデューが力学的モデルを形成するために後景に退かせた記号体系的、価値体系の問題を再び前面に引き出すことによって、界の研究にどのような貢献が可能になるかを次に論じていきたい。

Ⅲ. 分化・差異化した記号体系

Ⅲ-1. 記号体系的、価値体系的知識

ブルデューが国民国家的な社会空間と分化した界を往復しながら考察していったように、記号体系的、価値体系の問題においても、ソシユールのランクとより分化したサブ・ランクとの間を往復して考察していくことになる。哲学の界や社会学の界において界に参入した者だけが身につける言語・記号体系が存在しているということは、その特殊化・分化した言語体系が国民国家的なランクとしての言語体系から相対的に自律し、差異化・分化したことを意味する。記号体系が分化するということは、ある国民国家のなかでその記号体系を身につけている者といない者との分化が起こっているということの意味する。もっとも、界の中で相対的に自律した言語体系も、基本的に母国語としてのランクを共通基盤として持った上で差異化・分化している。同じように、サブ・カルチャー内でのモノグラフ的研究が明らかにする自律した記号体系、言語体系、価値体系を問題にする場合、ホーリズム的な記号体系と分化した記号体系との関係が問題となる。

ロラン・バルトはモードにおける記号体系を研究

している (Barthes 1967)¹⁹⁾。記号論の行う作業は、ある界の領域ないしは、あるサブ・カルチャー的コミュニティ内で共通に通用している記号体系を明白化することにあると言える。芸術の界であっても、科学の界であっても、界の分化が進めば進むほど、相対的に自律した特殊な記号体系が形成されていくことになる。共通の記号体系の形成は、価値体系の形成を含んでいる。とりわけ、それは芸術家あるいは研究者にそれぞれ望ましいライフスタイルのイメージの形成などとして現象する。

サブ・カルチャーにおける記号論的研究は、ひとまず、ある記号体系が国民国家的に共有されなくなる条件において、その特殊な記号体系を翻訳して解明することにある。この作業は、いわば界の新参者にその界で実践していくためのイニシエーション的な知識の伝授と同じ機能を果たす。界の新参者は、イニシエーション的に界における特殊知識を伝授されることで、界の中で起こっていることを理解し、見ることが可能になる。

バルトは、言語学のモデルを使った記号学の可能性を示した (Barthes [1956] 1964)。言語学においてランクが存在するように、言語以外の領域である映像、音楽、服装、マンガにおいてもその領域において共有されている記号体系を指し示することができる。記号体系の理解は、その界で起こっていることを理解するための重要な知覚図式あり、資本である。

あらゆる分化した文化生産の界において、新参者にはその界固有の記号体系の (そして界固有の社会規範の) 教育が必要である。社会学の界において何か研究をなすためには、社会学的知識を身につけなければ、その界で起こっていることも、その界で起こしうる行為の可能性も理解することができない。界において実践状態で闘争している者たちにとっては、自身に内面化された、あるいは敵対者の中に内面化された記号体系そのものが闘争の争点であり、もっとも強い関心の対象である。そのため界における闘争を客観主義的アプローチから記述するためには、界における記号体系を明らかにし、その記号体

系がもたらすヒエラルキーによって行為者たちの客観的位置を画定する必要がある。

界における闘争の媒介となっている記号体系、それも暗黙のまま実践状態で活用されている記号体系を明示化する作業は界における象徴構造の争点を明らかにする作業である。すなわち、分化した界における記号体系の明白化は、その界において実践を生み出すための教育という水準においても重要なことである。ブルデューの成した貢献は2つ面から捉えることができる。一方では行為者たちが記号体系を獲得する社会的条件、すなわち経済的条件や余暇の時間量などの獲得をめぐる闘争の力学の研究(『ディスタクション』や『再生産』においてなされた学校での成績と出身社会階級の関係に関する研究)がある。他方では、獲得された記号体系の押し付けをめぐって界において行われる象徴的闘争の力学の研究がある(ブルデューにおいては『ディスタクション』や『芸術の規則』においてなされた界における象徴闘争に関する研究)。

行為者たちの中で実践状態で行使されている知覚図式は、象徴的闘争のメカニズムの争点であるという特性を持っている。サブ・カルチャーにおいて行使されている記号体系はその理由から研究の対象となる。ブルデューによって示された象徴構造を媒介とした一般的な力学モデルは記号体系の変容についての説明を与えているが、一方で界において暗黙状態にある記号体系の明示化の作業はそれぞれの界において行われる必要があると言える。

Ⅲ-2. 力学的モデルの意味

以上のように、ブルデューにおいて後景に退いていた具体的で実践的な記号体系の明白化の問題を提示することができる。他方で、ここでやはりブルデューの力学的モデルに戻ることが必要になる。記号論的研究は、各芸術、科学分野で行われており、記号を科学化する作業は界の概念を待たずして行われていると言えよう。しかし、純粹に記号体系が自律的に存在していると考え、記号体系が変容した

り、新しい記号体系を課すことで、古い記号体系が更新されるということを問題にできなくなるし、さらに権力の界ないし社会空間において共有されている国民国家的な記号体系とより分化した記号体系との関係を考慮するという視点が失われてしまう。また、ラングの形成とサブ・ラングの形成は以下の問題を含んでいる。

哲学の界などにおいて形成されたサブ・ラングが一部の専門的文化生産者によって独占され、またその力を他の界に対して課することができるのはなぜなのか。分化したサブ・ラングは相対的に自律するだけでなく、他の記号体系との力関係という問題をはらんでいる。分化した記号体系は下位区分化し、特殊化していくだけでなく、支配的／非支配的という正統な記号体系を課すための闘争という状態にある。ある記号体系の影響力の大きさは、その記号体系をどれだけ多くの構成員に課することができるかに依存する。多くの構成員によって特殊な記号体系が共有されることを目指す戦略によって、サブ・カルチャー的な記号共同体が形成される。記号の共有をめぐって、支配的な記号体系と非支配的な記号体系は常に闘争の状態にあると言える。

また、記号体系の教育をめぐって、どのように学校などの制度を通してその教育が行われるのか、界が入場権として課すハードルとしていかなる記号体系の習得がどの程度に強制されるのかを分析する必要がある。さらに、誰にでもアクセスしやすく、すぐ実践的に使いこなせる記号体系ほど、文化資本としての価値は低くなるかなど、記号体系の大衆化と価値低下の問題を考える必要があるし、より稀少で獲得が困難な文化資本と、大衆化した文化資本との関係なども考える必要がある。

このように、ブルデューの力学的モデルに記号体系的な内実を加えることで、文化資本の内実を記述することが可能になると考えられる。サブ・カルチャー研究は力学的モデルの説明だけでなく、特殊な記号体系の明白化およびその習得と伝搬も問題にする必要がある。

Ⅲ-3. 実践的図式と理論的図式

一方で、共通の知覚図式を客観化することにあたっての注意点として実践的図式の問題をブルデューは提起している。この問題はブルデューが『実践感覚』(Bourdieu 1980)と『パスカルの省察』(Bourdieu 1997)において定式化した理論的視点と実践的視点の対立の問題である。

ブルデューは、カピリアの農民の儀礼の研究において、人々の知覚図式の客観化を行っている(Bourdieu 1980)。彼はカピリアの農村における一年の農作業のカレンダーを作っていく中で、インフォーマントによって時期について矛盾した発言があることに気がついた(*ibid.*: 333-337; 邦訳(2) 100-103)。実際のところ、カピリアの農民は頭の中に客観化されたカレンダーを持っているわけではなく、曖昧さを持った実践的判断図式をその場ごとに活用しているだけであり、その結果がある程度構造化された時期区分を形成しているだけであった。このことに気がついたブルデューは、実践的な図式を人工的で明白な理論的図式へと作り変えてしまう学者の傾向を理論的に把握する必要があると意識するようになった²⁰⁾。

Ⅱ-1で論じたように、科学の界は研究対象を論理的・客観的に把握することを争点とし、それに対して利害関心を持つように研究者を促す。しかし、一方で実践している人たちは、科学の界とは別の利害関心を追求しているために自分たちの行為と思考の客観化と抽象化に利害関心を持っていない。そうであるからこそ、自分たちの思考と行為についての客観的図式を頭の中に持っているわけではない。だから紙の上に言葉や図式によって再現された実践的図式は必ず人工的なものにならざるをえない。

実践的図式は大まかな図式でしか客観化できないというこの問題に加えて、本稿の一章で展開したように科学的な抽象化は初期においてもっとも初歩的な対象しか客観化できず、不完全であることの問題が加わる。人々は実践を抽象的な思考図式によって行っているのではなく、具体的なものを具体的なもの

のままに操作し、思考している。芸術作品を感じることやそれを創作することは、まさに実践状態で具体的なものを具体的なままに操作することである。サブ・カルチャーはより分化した領域であり、抽象化は困難であると同時に、人々は常に実践的な状態で作品の記号を操作していることに注意する必要がある。

しかし、この実践的思考図式が曖昧さを持っていたとしても、それは人々の知覚図式・分類図式・ハビトゥスが社会的・客観的に構成されていないということの意味しているわけではない。そのため、人工的であることは十分に理解したうえで、実践的図式を客観化することが必要である。この客観化に科学の界に参入している人たちは利害関心を見だし、また界の構造はその作業に承認を与えるのである。

結論

最後により下位区分へと向かっていく差異化の問題について考えたい。以上のように、行為者が具体的に使用する記号体系を、ラングの水準とサブ・ラングの水準の力関係によって考えた上で、界のさらなる分化、差異化がどこまで可能なかを考えたい。界が下位-場に分化し、その下位-場がさらに諸々の下位-場に区分される、という過程を押し進めていくと、理念上は個人の水準まで押し進めていくことが可能である。

加藤秀俊は、日本文化が東日本と西日本の文化に分化され、それが各都道府県のような地域文化に細分化され、それがさらに村文化、さらに字という近隣集団、そして家のしきたりとしての家の文化まで細分化しようとした上で、「その家族のなかのすべての個人が共有する文化、つまり家の文化もありますが、そのメンバーのひとりひとりに固有の文化というのひょっとするとあるかもしれない。……そんなふうに関人まで微分化されてしまった文化は、もはや文化という名前ではなくて、性格とか、あるいはパーソナリティということばでよんだほうがよ

かろうとおもうのですが……」(加藤 1985: 102-106)と述べている。分化していった特性を突き詰めていけば、究極的には個人という水準に突き当たる²¹⁾(自分にだけ意味がある記号体系もあるかもしれない)。もちろん、簡単に個人というレベルを問題にしてみれば、デュルケームやソシュールが設定した問題系がすべて水泡に帰してしまい、社会学という科学自体が成り立たなくなってしまう。そのため、記号体系の研究は、ある記号体系がその影響力を行使しうる範囲ないしは共有の程度、記号体系同士の力関係を考慮に入れながら、より分化した記号体系の研究へと向かう必要がある。つまり、学校などの教育機関や影響力のあるメディアの分析を通して、記号体系が共有され、押し付けられるプロセスを分析することが求められるのである。

界は力関係の空間であり、価値体系と記号体系が共有され、押し付けられ、それらの変革を求めて闘争される空間でもある。つまり、界はブルデューが強く関心を持った力学研究というテーマに加えて、共有され、押し付けられる価値体系と記号体系の研究対象でもある。

サブの界はどこまで形成可能なのか? 差異やサブの界は、理念上、無限に形成可能であるが(究極的には個人のレベルにまで行くことができる。自分にだけ意味を持つ記号など)、結局のところ、サブ界の境界はそこに共有される記号体系空間の広さによって限界づけられる。つまり国民国家の広さの水準である社会界では学校歴がほぼ全領域で通用する記号として機能する。要するに、広く社会界に通用している記号は非常に強力で経済資本などの物に匹敵するほどの力をもった記号と言える。界同士の闘争とは共通のコミュニケーション体系、記号体系をどこまで広げられるかの闘争でもある。今後の課題としてあげられるのは以下の問いになるだろう。マンガやポピュラーミュージックなどのそれぞれのサブ・カルチャーの界は権力の界との位置関係においてどこに位置しているのか。またこの位置関係の影響によって、この界に参入するものたちの出身階級

や社会的経歴はどのようなものになっているのか。その結果、この界の参入に望ましいハビトゥスはどんなものなのか。さらには、その行為者たちのハビトゥスの差異によって、その後の界のなかでの経歴にどのような変化が生じているか。等々の界の力学的な問いを考察しながら、かつ意識されないままにとどまっている記号体系を明示化していくことが今後の課題となるだろう。

力学的研究をしなければ、確かなになぜ記号体系が形成されるのか、共有されるのか、更新されるのかという運動を解明することができなくなる。しかし、界へ参入したい者たちへの教育のためには、むしろイニシエーションとしての価値体系と記号体系の教育が必要であるし、有用である。ブルデューが具体的な記号体系をあまり記述しなかったのは、おそらく具体的な記号体系についての記述が、主観主義的になりやすく(例えば調査対象者や「業界人」が使う説明体系をそのまま客観的メカニズムの説明として採用するなど)、それゆえ純粋に自律した記号体系のフェティシズムへと向かいやすく、そこで行使されている支配の客観的な力学的メカニズムが隠蔽されやすいことを配慮したためであると推測される。そういったブルデューの問題系の重要性を継承した上で、より具体的な界の研究のためにはそこで暗黙に共有されている記号体系を明らかにすることが必要である。

以上のように、ブルデューの強調した象徴構造の力学的モデルが現実に機能するためには、界が運動する際の記号体系と価値体系という経路と媒介が必要であり、象徴権力の運動はコミュニケーションのシステムを通して作用することが理解できる。文化生産の界における資本の蓄積とは、新しい記号体系の生成とそれの強制・押し付けによって起こるのであり、その過程を新しいスタイル、思考法の差異化・分化による構造的な象徴権力の行使として考察することができる。デュルケームが提起した社会的事実の問題は、より分化した構造においても全体性との関係の中で考察することができる。ソシュール

が記号体系は他の記号との関係によって形成されていると定義したように、界同士や界の中の行為者同士についても関係論的に思考することができる。この関係論的思考法はより差異化・分化していく文化領域において強力な武器となりうる。

象徴権力の作用の中で差異化するとは、個人の内部に社会的に生成された記号体系を界の構成員たちに承認させることによって、界の象徴構造の中での位置を獲得することに他ならない。構造主義によって示された差異化とは、既存の記号体系の中に差異を挿入していくことで既存の記号体系に新しい項を付け加えることに他ならない。新しい項の存在が社会的に承認されれば、つまりその存在の承認を社会的に押し付けることができれば、記号体系の全体が変化し、すなわち他の記号の意味も変容させられることになる。

今後はサブ・カルチャーの各領域、映像、音楽、服装、マンガなどの領域において、特殊化し、分化した形で共有されている記号体系を捉えるための方法をより洗練させる必要があると考えられる。それは界で行為している者たちによって実践されている知識である。ブルデューの界の概念によって記号体系の構造論的モデルは力学的な説明を与えられた。この力学的モデルをより洗練された記号研究の方法と接合することで、より具体的に分化した社会の状態を記述することが可能になるのである。

注

- 1) ソーンントンは『クラブ・カルチャーズ』(Thornton 1996: 163)において以下の点を強調している。「高級文化の規範や分類については広範に分析されてきたが、ポピュラー・カルチャーのディスタクション・システムはまだ完全に研究されていない。[...] この〔著書の中でとられた〕観点はポピュラー・カルチャーを平板なフォーク文化として、もしくは単線的な社会階層の中での最低の地位のものとして考察するよりもむしろ多次的な社会空間として考察する」と。また、ソーンントンは (*ibid.*: 96) は「メイン・ストリーム／サブ・カルチャー、商業主義／オルタナティブという二分法は、〔クラブというサブ・カルチャーにおいて〕ダンスをする聴衆がいかに客観的に組織されているかよりもむしろ、多くの若者文化が〔主観的に〕社会的世界を想像し、自分たちの文化的価値を測り、自分たちのサブ・カルチャー資本を主張するやり方に関係している」と主張して、若者固有の表象の世界があることを指し示している。若者の世界では、高級正統文化と民衆文化ないし非正統文化というディスタクションよりも、サブ・カルチャー内でのメイン・ストリーム／サブ・カルチャー、商業主義／オルタナティブという区分の方が行為者にとって評価基準となっているとソーンントンは考えている。
- 2) 例えばブルデューは界が以下のように下位-場に分割されると述べている。「文化的生産の界の自律性の程度は、〔界の〕外側のヒエラルキー化原理が〔界の〕内部のヒエラルキー化原理にどの程度従っているかに応じて明らかにされる。自律性が大きくなればなるほど、象徴的な力関係は〔消費者の〕需要からもっとも独立している生産者に対してますます望ましいものとなり、界の2つの極のあいだの裂け目はますますはっきりとしてくる。すなわち限定的生産の下位-場—そこでは生産者たちをもっとも直接の競争相手でもある他の生産者のみを顧客としている—と、大量生産の下位-場—この下位-場は象徴的には排除され、権威を失っているのが見て取れる—とのあいだの裂け目はよりはっきりと見られるようになる」(Bourdieu 1991: 7. 強調はブルデュー自身による。以下同様)。
- 3) 例えば北條 (1999: 138) は、「デュルケームは、社会的な差異や社会階級の問題を軽視し、一つの社会に複数の集合表象が存在する可能性、あるいは、相対的に自律した集合表象が諸階級や諸集団に応じて複数存在する可能性を十分に考慮していないのだ。ゆえに、ここまでの議論にとどまる限り、階級分化した社会・差異化された社会を決して十全には分析できない」としている。とは言え、このデュルケーム観は、ブルデューの社会学における貢献を示すために方法論的个人主義と方法論的全体主義ないしは社会構築主義と社会実在論の

二者択一という枠組みのなかでデュルケームを位置づけることから生じている。実際のところ、後掲注12の引用でブルデューが示しているように、デュルケームは社会の分化についてすでに問題枠組みを立てている。

- 4) ブルデューは『社会学者のメチエ』(Bourdieu, Chamboredon et Passeron [1968] 2005)において自身の科学認識論を展開し、科学がその研究対象を作り出す「対象の構成」のやり方と経験的研究の往復運動について論じている。その中でデュルケーム、ソシュール、マルクスらの「対象の構成」のやり方を高く評価している。
- 5) 上野(1985: 17)によれば「レヴィ＝ストロースもフロイト心理学の強い影響下に『無意識の深層構造』という言い方で構造の先験性を語っている。構造が先験的なものならば、空間的には民族の違いを超えて共通なはずである。……レヴィ＝ストロースはさまざまな構造は結局いくつかの単純な論理的操作の組み合わせに還元できることを示し、そのような普遍的構造を超構造(メタ・ストラクチャー)と呼んだ。だがそれはメタ・ストラクチャーが先験的であることを証明するものではなく、人間の論理的操作には、同一性や可逆性などの限られた種類しかないことの証明にすぎない。諸民族の多様な構造の研究が目指すのは……限られた論理操作を組み合わせて、諸民族がいかに多彩な構造を作り出しているかという、その『違い方』を明らかにすることである」。
- 6) ライールによれば、「界とは、全体の(国家的な)社会空間が構成するマクロコスモスの中におけるミクロコスモスである」(Lahire 1999: 24)。
- 7) ブルデューによれば、無意識inconscientという表現は科学的な対象構成において様々に道を誤らせる危険があるという。そのため、次のような簡単な表現を使うことを勧めている。「社会的主体は、自身が行っている行為や思考についてのはっきりとした意識をもっていない」(Bourdieu, P, Chamboredon, J-C. et Passeron, J-C. [1968] 2005: 152)。
- 8) 例えばエニック(Heinich 2012: 78-79)によれば、「マックス・ウェーバーにおいて再び使用された『正統性』概念は、芸術の領域において特別

な適用を経験した。この概念は、界を構造化している、多かれ少なかれ開放的なヒエラルキーを明らかにすることへと向けられて拡張された支配の社会学の基盤を構築しており、芸術との関係において行為者たちによって維持されている『幻想』を『脱神秘化』することへと向っている」。

- 9) ブルデューによれば『『象徴システム』は、支配の強制と正当化の道具という政治的機能を果たす』(Bourdieu 1977: 408)。
- 10) 北條(1999: 137-138)によれば、「ブルデューにとって象徴システムは、単に認識とコミュニケーションの道具ではなく、むしろ権力や支配の道具、より正確に言えば、認識とコミュニケーションの道具であるがゆえに、客観的には誤認の行為であるにもかかわらず、現実＝社会的世界の見方を構成することを通じて恣意的な社会的秩序の正当化、既成秩序の維持・転覆に寄与する合意を可能にする、支配の道具なのである」。
- 11) ブルデューによれば『『分類の原初的形態』は集団の構造に一致しているというデュルケームの仮説を一般化するならば、分化した社会において、同一ないしは似たような認識・評価構造である共通の見方と分割の原理を、ある領土的権限というレベルにおいて普遍的なやり方で教え込むことのできる国家の作用によってより倍加している社会構造の『自動的』身体化の効果のなかに、その分類形態の原理を求めることができる』(Bourdieu 1997: 248; 邦訳 294-295)と解している。
- 12) ブルデューによれば、社会の分化の傾向はデュルケームによってすでに述べられている。「権力の界の出現は、相対的に自律した複数の界の出現、すなわち社会的世界の分化と連関している(これを階層化の過程と混同しないように注意しなければならない。これが社会的ヒエラルキーの確立に帰結するにしても)。この過程はデュルケームによってすでに分析されていた。デュルケームは、世界は『均質性から不均質性』へと向かっていくとしていたスペンサーを延長することで、ベルクソンの『統一主義的生気論』に反対して、『多様な機能』がすでに現れているが『混合の状態』にある『未分化の原初的狀態』から『多様ではあるが原初的には混合されていたこれらのあらゆる機

- 能の漸進的分離』への変化を提起している。『非宗教的、科学的思考が、神話的、宗教的思考から分離される。芸術は宗教的祭式から分類される。道徳と法律は慣行から分離される』(特に Durkheim, *Pragmatisme et Sociologie*, 1955: 191-193. を参照のこと) (Bourdieu 1989: 376, note 2)。
- 13) しかし、多くのデュルケーム論者は、「社会的事実を物として扱う」というテーゼを社会実体論としたり、ホーリズムのアプローチとする説をむしろ退けている。小関 (1978: 92) も「社会的事実の客観的現実性は、必ずしも社会的实在論を要請しなければならないことはない」と主張している。
- 14) グルヴァレックは、フリス (Frith, *Performing Rites: On the Value of Popular Music*. 1996) やソーントン (Thornton 1996) がブルデューの文化資本概念を「逆に」機能させようとしているとした上で (Gleavrec 2005: 83), 以下のように結論づける。「我々は現代の音楽実践の分析から2つの確認を取り出すことができる。それは (サブ) カルチャー資本の推進 [上記のようにグルヴァレックはブルデューとは「逆に」文化資本を考えようとしている] と、そして、正統的秩序の非一貫性である [...]。そこから以下の帰結が生じる。今では音楽のサブ・カルチャー [...] は支配的文化によってもメディアの原理によっても決して構造化されていない空間において存在している」(ibid: 85)。ソーントンの主張については注1を参照のこと。
- 15) 界に参入するとは界で問題になっていることが見えてくるということである。「本質的には行動と表現の特有のコードを習得することである入場権の獲得によって、文化生産の界に参入していくことと、解決すべき問題、スタイルの可能性や探求すべきテーマ、乗り越えるべき矛盾、さらには行うべき革命的な切断などの、界が提起する強制のもとでの自由 *libertés sous contraintes* と客観的な潜在的な可能性から成る有限の世界を発見することはひとつの同じことである」(Bourdieu 1998: 385-386: 邦訳 II 94)。
- 16) 界が固有の法則と争点を持っていることは、その界に固有の資本が存在しうると定義できる。それぞれの行為者のハビトゥスが界において有効であるかは当該のゲームの性質との関係によって決定される。「実践において、すなわち特定の場において、行為者に与えられた身体化されたあらゆる特性 (性向 *dispositions*) ないし客体化された特性 (経済的ないし文化的な財) はいつも同時に有効なわけではない。それぞれの界の特有の論理は、その市場において適用している特性、当該ゲームにおいて妥当 *pertinentes* であり、有効である特性、その界との関係において特有の資本として機能し、それによって諸実践の説明要因として機能する特性を規定する」(Bourdieu 1979: 127: 邦訳 I 177)。
- 17) デュルケームもまた個人から独立した社会的事実を提起しているが、一方で『社会分業論』において分業を促進する条件として都市への人口流入による密集化などをあげて、社会的事実の変容を歴史的に説明しようとしている。また『自殺論』においても、自殺を行う傾向が様々な社会関係の条件によって変化することを示している。
- 18) エニックによれば (Heinich 2001: 13), 美術史家のアーヴィン・パノフスキーは「イメージの解釈において分析の3つの水準を区分した。それはアイコン (まさしく造形的な次元) とイコングラフィー (アイコンの識別を可能にする絵画の慣習) とイコノロジー (イメージの基盤である世界観) という水準である。この3つ目の水準は作品と社会の『象徴形態』を関係づけることを可能にする (Panofsky [1955] *L'Œuvre d'art et ses significations.*)」。
- 19) バルトは『モードの体系』において、ファッション雑誌の研究を進めていくなかで3つの記号体系の水準が存在していることに気づいた (Barthes 1967)。それは、服飾の造形的・工芸的・職人的水準と、ファッション雑誌に掲載される写真の構図というイメージの水準と、写真の横に並ぶ言葉という水準の3つである。バルトはこの著書において、結局は第三の「書かれたモード」という水準の分析のみを行っている。ファッションを言葉によって提示するということの恣意性 (なぜこのデザインの服にこの言葉が結びつくのかについては必然性がない) に関心を持ったためである。

- 20) ブルデューによれば「スコラ的見方は理論的視点と実践的視点の差異を方法的に問うことをしない。一切の純粋な思弁的意図とは関係なく社会科学における研究のもっとも具体的な作業（面接調査を実施する、ある実践を記述する、系図を作成する、など）を進める際には、この差異の検討は不可欠である。実践をその固有の論理において把握し、ただしく理解するために必要なまなざしの転換をおこなうためには、理論的視点に対して「さらなる」理論的視点を取らなければならない」(Bourdieu 1997: 81: 邦訳95-96)
- 21) この点に関してブルデューの弟子である Lahire (2004) の提起する「諸個人の文化」という問題構成は今後の重要な研究課題のひとつとなるだろう。

参考文献

- Barthes, Roland ([1953] 1964), *Le Degré Zéro de L'Écriture suivi de Éléments de Sémiologie*, Paris, Éditions du Seuil. (ロラン・バルト著, 渡辺淳・沢村昂一訳『零度のエクリチュール』, 1971年, みすず書房)
- Barthes, Roland (1967), *Système de la Mode*, Paris, Éditions du Seuil. (ロラン・バルト著, 佐藤信夫訳『モードの体系』1972年, みすず書房)
- Bourdieu, Pierre (1968), “structuralism and theory of sociological knowledge”. in *Social Reserch*, vol.35, No.4, winter, 1968. pp.681-706.
- Bourdieu, Pierre (1971), « Champ du pouvoir, champ intellectuel et habitus de classe », in *Scolies. Cahiers de recherches de l'École normale supérieure*. Paris, Vol. 1. pp.7-26.
- Bourdieu, Pierre (1977) « Sur le pouvoir symbolique ». in *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*. 32e année, N. 3, pp.405-411.
- Bourdieu, Pierre (1979), *La Distinction*, Paris, Les Éditions de Minuit. (ピエール・ブルデュー, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I』1989年, 『ディスタクシオン II』1990年, 藤原書店)
- Bourdieu, Pierre (1980), *Le Sens Pratique*, Paris, Les Éditions de Minuit. (ピエール・ブルデュー, 今村仁司・港道隆共訳『実践感覚 1』1988年, 『実践感覚 2』1990年みすず書房)
- Bourdieu, Pierre (1984), *Questions de Sociologie*, Paris, Les Éditions de Minuit. (ピエール・ブルデュー, 田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店, 1991年)
- Bourdieu, Pierre (1989), *La Noblesse d'État*, Paris, Les Éditions de Minuit. (ピエール・ブルデュー, 立花英裕訳『国家貴族 I』2012年, 『国家貴族 II』2012年, 藤原書店)
- Bourdieu, Pierre (1991), « Le champ littéraire », in *Actes de la recherche en sciences sociales*, Vol. 89, septembre 1991, pp.3-46.
- Bourdieu, Pierre (1994), *Raison Pratique*, Paris, Éditions du Seuil. (ピエール・ブルデュー, 加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳『実践理性』2007年, 藤原書店)
- Bourdieu, Pierre (1997), *Méditations Pascaliennes*, Paris, Éditions du Seuil. (ピエール・ブルデュー, 加藤晴久訳『バスキルの省察』藤原書店, 2009年)
- Bourdieu, Pierre (1998), *Les Règles de L'art*. (nouvelle édition revue et corrigée), Paris, Éditions du Seuil. (ピエール・ブルデュー, 石井洋二郎訳『芸術の規則 I』1995年, 『芸術の規則 II』1996年, 藤原書店)
- Bourdieu, P, Chamboredon, J-C. et Passeron, J-C. ([1968] 2005), *Le Métier de sociologue*, 5e édition, Mouton de Gruyter. (ピエール・ブルデュー, ジャン＝クロード・シャンボルダン, ジャン＝クロード・パスロン著, 田原音和, 水島和則訳『社会学者のメチエ』1994年, 藤原書店)
- Bourdieu, P et Passeron, J-C. (1970), *La Reproduction*, Paris, Les Éditions de Minuit. (ピエール・ブルデュー著, 宮島喬訳『再生産』1991年, 藤原書店)
- Brubaker, Rogers (1985), “Rethinking Classical Theory, The Sociological Vision of Pierre Bourdieu”, in *Theory and Society*, no 14-6: pp.745-775.
- Durkheim, Émile ([1894] 2007), *Les règles de la méthode sociologique*, Paris, PUF. (エミール・デュルケーム著, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』1978年, 岩波書店)
- Glevarec, Hervé (2005), « La fin du modèle classique de la légitimité culturelle. Hétérogénéisation des

- ordres de légitimité et régime contemporain de justice culturelle. L'exemple du champ musical» in E. Maigret et M. Macé (dir.), *Penser les médiacultures. Nouvelles pratiques et nouvelles approches de la représentation du monde*, Paris, Colin/INA, pp.69-102.
- Heinich, Nathalie (2012), *La sociologie de l'art*, nouvelle édition, La Découverte.
- Jourdain, Anne et Naulin, Sidonie (2011), *La théorie de Pierre Bourdieu et ses usages sociologiques*, Paris, Armand Colin.
- Lahire, Bernard (1999), « Champ, hors-champ, contrechamp », in Lahire, Bernard (dir.), *Le travail sociologique de Pierre Bourdieu. dettes et critiques*, Paris. La Découverte, pp.23-57.
- Lahire, Bernard (2004), *La Culture des individus. Dissonances culturelles et distinction de soi*, Paris, La Découverte.
- Lenoir, Remi (2012) « Bourdieu avec Weber ». in Lebaron, Frédéric et Mauger, Gérard (dir.). *Lectures de Bourdieu*, Ellipses Édition. pp.41-59.
- Saussure, Ferdinand ([1916] 2005), *Cours de linguistique générale*, Paris, Payot.
- Thornton, Sarah (1996). *Club Cultures. Music, Media and Subcultural Capital*, University Press of New England.
- 磯直樹 (2008) 「ブルデューにおける界概念 一理論と調査を媒介にして」『ソシオロジ』, 第53巻1号, 37-53頁。
- 上野千鶴子 (1985) 『構造主義の冒険』 勁草書房。
- 宇都宮京子 (1995) 「『行為と自省性』をめぐる理論の系譜」宮島喬編『文化の社会学 実践と再生産のメカニズム』所収, 有信堂高文社。
- 加藤秀俊 (1985) 『文化の社会学』PHP 研究所。
- 小関藤一郎 (1978) 『デュルケームと近代社会』法政大学出版。
- 宮島喬 (1994) 『文化的再生産の社会学』藤原書店。
- 田辺浩 (1995) 「行為理論の革新 構造化, 行為, 反省性」宮島喬編『文化の社会学 実践と再生産のメカニズム』所収, 有信堂高文社。
- 水島和則 (1995) 「文化的再生産と社会変動 構造—行為関係からの再構成」宮島喬編『文化の社会学 実践と再生産のメカニズム』所収, 有信堂高文社。
- 林芳樹 (1991) 「文化と差異化」宮島喬・藤田英典編『文化と社会 差異化・構造化・再生産』所収, 有信堂高文社。
- 北條英勝 (1999) 「ブルデューにおけるデュルケーム社会学の受容と断絶—集合表象の理論から象徴的支配の社会学へ—」P.ブルデュー社会学研究会編『象徴的支配の社会学 ブルデューの認識と実践』所収, 恒星社厚生閣。

The Application of Bourdieu's Field Concept to Semiology of Sub Cultures : Differentiation of Symbolic Structures.

HIRAISHI Takashi ⁱ

Abstract : This paper discusses the field concept of Pierre Bourdieu, especially the dynamics of the field through symbolic systems and the application of this concept to the research of subcultures; popular culture, Manga, music, etc. Many researches on subculture have discussed the autonomy of subculture from a viewpoint of symbolic systems created by agents in subculture. But, the analysis of subculture which treats symbolic systems of subculture as independent from that of main culture tends to ignore its relations of power with main culture. Bourdieu's field concept gives explanations of this relations of power, analyzing relations between the global social field and differentiated fields. Articulating the field concept with semiological approach, we can think about the process in which basic symbolic systems (e.g. Langue as Saussure says) differentiate into particular symbolic systems shared by agents in a particular field. The relations of different symbolic systems in social field function as the dynamics inter different fields. And this dynamics is determined by social and educational conditions of the production of agents. This dynamics functions through symbolic struggle between agents, which is mediated by symbolic systems.

Keywords : Bourdieu, differentiation, field, symbolic power, semiology, subculture

ⁱ Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University